

平成20年3月19日
農林水産省生産局

「品目別生産コスト縮減戦略」の作成及び普及について

1. 趣旨

- (1) 農業現場での生産コスト縮減に向けた取組を支援するため、各都道府県から報告いただいた農業現場での実際的な取組事例をもとに、主な品目の生産コストの縮減に向けた取組を取りまとめた「品目別生産コスト縮減戦略」を作成した。
- (2) 本戦略の作成に当たっては、昨年10月の食料供給コスト縮減委員会に素案を報告後、都道府県等から意見を聴取し、取組事例や記述の精査を行うとともに、コスト縮減に向けた先進的な生産システムの例等を追加する等、内容の充実を図った上で、2月に公表するとともに、普及浸透を図っているところである。
- (3) また、農業現場で本戦略を活用して、生産者や地域で生産コスト縮減に向けてどのような取組が可能かを検討していただくため、本戦略の取組内容を品目別に1枚で整理した「取組チェックシート」を作成し、併せて普及浸透を進めているところである。

2. 構成

- (1) 策定品目
水田作(水稲、麦、大豆)、畑作(てん菜、ばれいしょ、麦等)、地域特産作物(茶)、露地野菜(キャベツ)、施設野菜(トマト)、果樹(みかん、りんご)
- (2) 策定内容(品目別生産コスト縮減戦略の構成)

生産コストの現状 コスト縮減が必要な費目、規模拡大の制約となる作業等を明確化するほか、コスト縮減に向けた基本的考え方を整理 生産コスト縮減の主な取組事例 農業現場でのコスト縮減に向けた取組の事例、導入の効果や導入上のポイントを整理 優良農家の取組事例 生産コストの大幅低減を実現した農家や法人の取組事例を整理 生産コスト縮減に向けた技術開発 先進的な生産システムやコスト縮減に向けた技術開発の状況について整理

- (3) 取組チェックシート
各品目別に生産コスト縮減に向けた取組事例を1枚で整理。各品目の生産コスト縮減に向けた取組だけでなく、資材費の低減等の品目共通的な取組についても列挙しており、チェックシートを確認することで、各品目についてそれぞれが今後実施可能な取組を検討できるように作成したもの。

3. 今後の取組

- (1) 都道府県及び生産者団体等を通じて、「戦略」及び「取組チェックシート」の普及を進めているところであり、今後、農業現場での「再発見運動」等を通じて、現場段階での新たなコスト縮減の取組に関する検討・実践を推進する。
- (2) 本戦略については、「戦略」を実践した結果や意見などの情報を収集し、今後の「戦略」及び「取組チェックシート」の改善に反映させる。
- (3) 各品目ごとの重点的な取組(水稲直播、大豆300A技術、低コスト耐候性ハウス等)については、取組が進んでいる地区の取組を他地域に紹介するほか、各地域における技術・経営上の課題の把握と解決、各種推進計画への反映等により、取組を促進する。

品目別生産コスト削減戦略の概要 (水田作(水稻)の例)

1. 生産コストの現状

生産費の現状

生産費の大きな割合を占め、低減効果の大きい費

賃借料及び料金、農機具費で費用合計全体の約3割を占める

肥料・農業薬剤費も合わせて13%を占める

相対的に高い生産費は低減

労働時間の現状

労働時間が多く、規模拡大の阻害要因となるプロ

育苗・田植作業が全体の26%を占め、規模拡大

表1 米の生産費(平成18年産 全国平均) (円/10a)

物財費	販売農家平均	構成比
種 苗 費	76,610	65%
肥 料 費	3,851	3%
農 業 薬 剤 費	7,987	7%
光熱動力費	7,100	6%
土地改良及び水利費	3,788	3%
賃借料及び料金	5,847	5%
農機具費	13,353	11%
その他物財費	22,258	19%
労働費	12,426	10%
費用合計	41,995	35%
	118,605	100%

資料: 農林水産省「農業経営統計調査」

2. コスト削減に向けた基本的考え方

基本的考え方

直播栽培や複数品種の組合せにより作期の分散を図り、規模拡大

直播栽培の導入により育苗・田植え等の春作業の省力化を進めるほか、早生・中生・晩生等の品種を組み合わせることで、作期の分散を図り、規模拡大

稼働面積の増加を図り、農機具費と賃借料及び料金を低減

規模拡大、農業機械の水稻・麦・大豆の汎用利用により、機械1台当たり稼働面積の増加を図り、面積当たりの農機具費を低減する。

共同乾燥機械の利用料金については、荷受期間の拡大等により、施設の処理量の増加及び処理量当たりの施設経費の低減を図り、利用料金の値下

省力的な栽培管理方法の導入

育苗管理作業が低減できるプール育苗や疎植栽培、防除が軽減できる病害虫抵抗性品

3. コスト削減に向けた主要技術

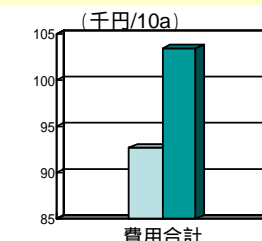
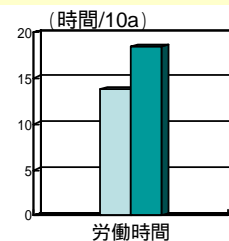
直播栽培

概要

- 種もみを直接水田に播種する技術で育苗不要。
- 移植に比べて、出芽・苗立ちの初期生育の遅れ、鳥害や雑草

メリット

春作業の省力化(育苗不要)が図られるため、労働時間は2



普及に当たっての留意事項

- ほぼ場均平を徹底することが重要
- 出芽・苗立ちの確保は、特に湛水直播では播種直後から出芽期までの落水が有



高精度湛水直播機

4. コスト削減に向けた取組事例

農業現場でのコスト削減に向けた取組事例をその結果とともに紹介。

複数品種の導入による作期の分散を通じた規模拡大

早生(あきたこまち等)・中生(コシヒカリ等)・晩生(日本晴等)品種を組合

<取組成果の例>

農業機械の共同・汎用利用

田植機やコンバイン等の共同利用や水稻・麦・大豆の複数品目で汎用播種機や汎用コンバインを汎用利用することで稼働面積を拡大し、農機

<取組成果の例>

その他
(病害虫抵抗性品種の導入、温湯種子消毒、プール育苗、疎植栽培、共同利用施設における乾燥調整料金の値下げ など)



汎用コンバイン

5. 優良農家の取組事例

様々な取組を組み合わせ、実際にコスト削減を実現した経

事例 品種・栽培方法の組合せによる規模拡大の実現

経営概要

- 法人経営 労働力:6名(うち雇用3名)
- 経営面積:75ha(水稻54ha、大麦7ha、大豆13ha)

コスト削減の取組

湛水直播栽培の導入

水稻作付の約4割で湛水直播栽培を実施

全量基肥施肥栽培体系の導入

全量基肥施用による施肥量の削減、作業の省力化を図る。

プール育苗の導入

品種導入による作期分散

コシヒカリ、ミルキーQueen、ゆめみづほ、ヒメノモチ等の早生・中生品種を組合せ導入

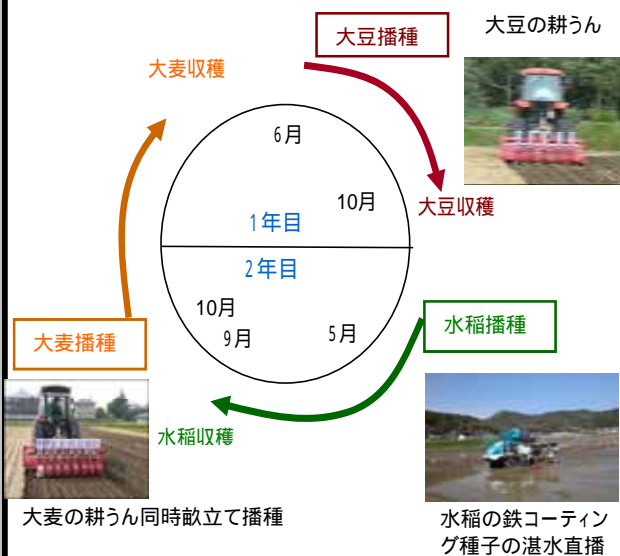
取組の成果

労働時間(水稻)が県平均から約4割減(19hr/10a)

6. 今後導入が期待される技術(水田作)

先進的な生産システムの例

寒冷地2年3作水田輪作地帯に対応した低コス



今後導入が期待される技術

麦の不耕起V溝播種技術
直播等低コスト栽培(水稻)や早

7. 作物共通の取組(資材費等の低減)

肥料費

- 安価な肥料の探索(輸入高度化成肥料など)
- 割引制度の活用(フレコンによる受入、一括購入(大口割引))



	(円/t)	割合(%)
20kg袋	52,920	(100)
バラ輸送	47,100	(88)
フレコン輸送	48,300	(91)

農薬費

- 安価な農薬の探索(軽量化除草剤など)

光熱動力費

- 免税軽油の利用

農機具費

- 安価な機械の導入(JAグループ独自型式農機など)

諸材料費

- 野菜等出荷箱の茶色化

品目別生産コスト削減取組チェックシート(水田作)

水田作における生産コストの低減に向けた取組事例を一覧にしたものです。今後、皆さんの経営(又は地域)において導入可能な取組がないか一つずつ

水稻		麦		大豆	
コスト削減の取組	チェック	コスト削減の取組	チェック	コスト削減の取組	チェック
直播栽培		不耕起栽培		無中耕・無培土栽培(狭畦省力栽培)	
高精度湛水直播機		省力化技術		省力化技術	
複数品種の導入による作期分散		複数品種の導入による作期分散		不耕起狭畦密植栽培	
機械の共同・汎用利用		多収技術		不耕起播種技術	
		早生・多収品種の導入		耕うん同時畝立て播種	

共通					
コスト削減の取組	チェック	コスト削減の取組	チェック	コスト削減の取組	チェック
経営診断に基づく経営改善		病害虫の発生状況に応じた防除の実施		集約農機具等における余剰機械の整理等による農業機械の効率利用	
労働時間の記録管理と雇用や作業委託の導入によるピーク時の緩和		農機具費		免税軽油の利用	
作業組合や機械の利用を踏まえた効率的な作物別・品種別作付計画の作成		温湯種子消毒の利用(水稻)		光熱動力費	
土地利用集積による経営規模の拡大		作業規模に応じた馬力・能力の機械の選択		機械の省エネ運転	
		低価格農機(HELP農機)の選択を検討		共同利用施設の稼働率の確保	
		低価格農機(JAグループ独自型式等)の選択を検討		賃借料・料金	
				作業委託の推進	